

---

100%

長谷川 麗音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

100%

### 【コード】

N2240C

### 【作者名】

長谷川 麗音

### 【あらすじ】

走って走って走って、辿りついたのは暗闇の中だった。私は何を  
目指して駆けてきたのか。どうしてここにいるのか。誰か、教  
えて…

「あれ？転入生の麻南じゃ〜ん」

すぐ近くで、声がした。

「今、目が合ったよね？」

「無視？」

随分春めいてきた長閑な朝とは似つかわしくない、異様なオーラを出す女のコたち。

私と同じ一年生だろうか。

「えっ、あ…おはよう」

「おはよ」

軽蔑と怒りを含んだような眼差しでこっちを見ている。  
誰だろう…。

「ウチ、笠井ってゆうの、ヨロシク。」

「ウチは栗野亜美」

「あたし保土田結実。」

「鈴木麗奈」

彼女たちは次々と自己紹介をした。

「私は…麻南優愛、です」

「知ってる」

と鈴木さん。

うーん…なんか、怒っているみたい。

「なあ、こっち来いよ」

グイ。

グループのリーダーらしい笠井さんが、私の腕をひっぱる。

「え…。」

嫌な予感がする。

これってもしかして…。

「早くしろよお」

断る理由も無いので、仕方なく彼女たちについて行った。

だけど連れてこられたのはやっぱり体育館の裏だった。

そして彼女たちは周りに誰もいないことを確認すると、顔を見合わせ彼女たち同士で目配せをした。

「お前ウザいよ」

「きゃあ！」

鈍い音がして、背中に激痛が走る。

無抵抗の私は土臭い地面に倒れこんだ。

「何がきゃあ！だよ」

「こんな時までぶりっこお〜？」

違う！私、ぶりっこなんてしてない！

「自分は可愛いとか思ってたの？」

「金持ちのお嬢さまだからって調子乗んなよ」

彼女たちは私を取り囲んで、一斉に暴力を振り始めた。

「つーか何で東京のトップがこの中学に来るんですか？」

「優等生ぶってるくせに茶髪ってどういうこと？」

「お前マジうぜえんだよ」

「死んでくれない？」

どうしてこんなに怒ってるんだろう。

私、何かしたっけ！？

「そのまま入院してれば良かったのに」

「ホントホント」

「医療ミスで、死んじゃえ〜」

ハハハハハ・・・

甲高い笑い声と吊り上った目じりには、何とも言えない威力があった。

相手は集団だし、私には、抵抗する由が無い。

黙って耐えているだけ…。

怖い。

痛い。

誰か助けて…。

キンコンカンコーン

「あっチャイム鳴ったよ」

「そろそろ戻んなきゃじゃん？」

「いこいこ」

ドタバタと慌しく引き揚げていく彼女たちの後ろ姿を見る私は、情けないけど気絶寸前だった。

閉じかけていた目を無理矢理開けなくても感覚で分かるよ。

蹴られたり殴られたり顔や足には血が滲んでいて、制服と通学鞆は砂だらけ。

一体、何でこうなったんだろう。

チャイムが鳴らなかつたら私、どうなっていたんだろう…。

とりあえず立ち上がって制服の汚れを払い、ハンカチで血を拭いた。私も急いで教室に行かないと。

唇をそつと噛んで涙を堪え、鼻をすすってから足早に教室へ向かった。

## 1\*新しい出会い

ガラガラ…。

一年三組と書かれたドアを、開けた。

私にとってはまだ新鮮な教室。

チャイムは鳴ったけれど、生徒はまばらでしかいなかった。

こんなに急ぐことも無かったかもしれない。

「おはよう」

明るい声…誰かな。

振り向くと想の笑顔があった。

この学校で出来た、最初の友達。

「おはよう」

私も笑顔で言った。

「あれ？顔、ケガしてるよ？どうしたの？」

その途端、複数の視線がこちらに投げかけられた。

笠井さん…たちがいる。

同じクラスだったんだ…。

言うなよ、言ったらどうなるかわかってるんだろうな。

そう言ってきたような気がした。

「ん…？何でもないよ。」

想は素直で優しいコ。

私の言葉を信じてくれたようで、黙って絆創膏をくれた。

「ありがとう。ごめんね…」

まだ馴染んでいない制服のスカートを押さえて、自分の席に腰掛けた。

「ねっ、東京の話、聞かせてよ」

想が笑顔で言う。

「東京…？」

「原宿とか、渋谷とか」

「うん私、あんまり渋谷と原宿は好きじゃないんだ。」  
「どうして？」

大きな瞳は興味深そうに輝く。

「だって、人が多いんだもの」

「え〜でも、お洒落なお店とかいっぱいあったりして、楽しいんじゃないの？」

「まあ、それはそうだけど…。」

私はあんまり流行とかに興味が無いんだよね。

「あ、先生来たっ」

想がくるつと向きをかえて、教卓の方へ向いた。

想の言った通り、先生が入ってきた。

「きりーっ!」

いつの間に揃ったのか生徒たちはみんな一斉に立ち上がった。

「れいっ」

おはようございまーす。

私も周りに合わせてそう言う。

「着席」

ふわっという音が聞こえたような気がした。

座った瞬間に、何やら机の中から紙が出てきたのだ。

いくつかの丸められた紙。

ゴミかな…?

開いてみると、そこには、悪口雑言が並べ立ててある…

ゴミよりもずっと酷い。

ふと視線を横に送ると、笠井さんたちがクスクス笑っている。

ああ、彼女たちの仕業か…。

「おい、麻南!」

斜め後ろの席の、男の口が声をかけてきた。

「何？」

「…耳貸して」

すると彼は小さな声で、

「今朝、麻南の椅子がベランダに出されてたんだ。気をつけるよ」と言った。

これもきつと笠井さんたちがしたんだろう。

「教えてくれて、ありがとう」

「おう。」

彼の名は、浜田亮くんというらしい。

とりあえず、この人は笠井さんたちの仲間ではないらしいので、安心した。

だけど、一つ、気になること…。

紙に書いてあった悪口の中に、「転入生のくせに…」というものがあつた。

私は転入生じゃない。

受験を済まし、きちんとこの私立中学に受かったんだけど、入学式の前に喘息の発作を起こしてしまって、一週間ほど入院していただけ。

双子のお兄ちゃんである弘樹は入学式の日から通っているけど、私は昨日初めてこの教室に入った。

弘樹は「3組に変なやつらがいるらしいから気をつけるよ」と言っていたけど、変なやつらとはどうやら笠井さんたちらしい。

私と弘樹は当然だけどクラスが違うし、部活も違う。

だけど、帰りは待ち合わせして一緒に帰ろうねって約束してる。

私たちは、仲良しなんだ。

お父さんは不動産会社の社長でお母さんはスチワーマデスだから家に二人でいることが、昔から多かった。(使用人たちを入れると六人になるけどね。)

中学も一緒のところ良かったから、私は弘樹に合わせて志望校を少し下げた。

弘樹が笠井さんたちのことを知ったら、ボコボコにしちゃうだろうな…。

だけど、そもそも笠井さんたちは何を怒っているのだろうか。

特に私が何をしたわけでもないし…。  
よくわからないけど、とにかく彼女たちが私の存在を快く思っていないことは確かだ。  
これから先、不安でしょうがない…。  
わざわざ電車で一時間半のこの中学じゃなくて、弘樹と別々でも地元の公立中学に行った方が良かったかな。  
早くもそんな後悔が胸を占めているのだった。

帰りのホームルームが終わり、私は緊張しながら音楽室へ向かう。入院中どの部活に入ろうかずーっと考えていたけれど、結局吹奏楽部しか思い浮かばなかったから今日、見学をさせてもらうことにした。

私は小さいころから独学でフルートとホルンを吹いていて、時々弘樹と一緒に家の音楽室で吹いたりもする（弘樹はサクソとトランペットだけだね）。

だからそういうった面での心配はないと思う。ただ問題は、とにかく人間関係かな。

コンコン。

音楽室の分厚いドアをノックした。

「はい」

たたたたつ、と誰かが走ってくる足音。

ちよつとしてから、ドアはガチャリと音をたてて開いた。

「こんちわ」

にこつと笑ったその男の子は、茶髪で私よりも背が高くって、首からサクソスを吊るストラップを提げていた。

「こんにちは…見学の麻南です」

伏し目がちの私の手には、微量の汗。

「じゃ、こつち来てー。はい、座っていいから」

まだ部員は揃っていないみたいでザワザワしているけれど、私は用

意されていた椅子に腰を下ろした。

その男の子は、気さくだった。

「帰るときとか、何かあったら呼んで。オレ、アルトの桔平だから。」

「うん…」

彼…じゃなくて桔平くんは、そう言うてから自分の席へ戻り、おそらく基礎練習であろう演奏を始めた。

ロングトーンと音階だけだったけど、実力は十分過ぎるくらいに伝わった。

この人、凄い…。

アルトサクスの細いけれども存在感のある音色と、自在に動かす十本の指、そしてきれいな横顔…

この人と一緒に吹いたら、どれだけ心地良いだろう。

どれだけ美しいハーモニーが生まれるだろう。

私はもう、すっかり桔平くんの奏でるサクスの音色に惚れてしまった。

弘樹の音色も大好きだったんだけど…。

気付いたときには顧問の先生に入部届けを提出し、帰りの電車に乗り込んでいた。

忘れようとしても頭の中でながれ続けるサクスのメロディー、桔平くんの笑顔…

もしかしたら、もしかしたらただけど私、桔平くんのこと、好きになっちゃったかもしれない…。

## 2\*クラスメイトの入院

テストが返ってくる。

中学生になってから初めての、一学期期末テスト。

今日までに国語・算数…いや数学・英語・社会・体育・美術・家庭技術・音楽の八科目が返ってきたけど、どれも満点だった。

あとは理科だけ…。

緊張と期待でドキドキする。

「麻南さん」

「はい」

みんなが見てる。

オール満点が成ったのかどうか、この瞬間に分かる。

教室中が、静まり返っている。

「はい、おめでとう。百点です」

そこには先生が書いたクセのある花丸があった。

やったあ！私オール満点！！

「すげえ、麻南！」

「まじお前最強じゃん？」

「やったね、優愛！」

浜田くんや想、それから部活が一緒の高田さんたちは一緒に喜んでくれた。

だけど笠井さんたちは…そっぽを向いている。

ああ、怖いなあ。

また今日の昼休み、呼び出されるかな…。

入学した次の日から三日に一度は彼女たちに呼び出されていたけれど、テストに近づくと勉強で忙しいのかあまり無くなった。

今日あたり、来るかもしれない…。

「痛い！」

ふいに足元が歪んだ。

「じつ、ごめんなさい…」

隣の席の五十嵐くんの足を、踏んでしまったようだ。少し浮かれ過ぎていた、私が悪い。

顔を上げた彼は…一瞬驚いたように固まって、でもまたすぐに元の怒った顔に戻った。

「何すんだよ！ すぐえ痛いんですけど」

すっごく怒ってる。

「本当に…ごめんなさい。」

このやりとりを聞いていたのか、浜田くんが寄ってきて言った。

「お前怒りすぎだろ？ 麻南はわざとじゃないだろうし、そんなに怒ることないじゃねーかよ」

「でも浜田くん…」

悪いのは私、だもん。

って言おうとしたけど、五十嵐くんは無言で席に座り、机にうつ伏せてしまった。

ケンカをする気は、無いみたい。

「浜田くん…ごめんね。私が悪いの」

「麻南は悪くねーって。それよりさ、満点の答案見せてよ。ホントすごいな。オレなんてさ…」

浜田くんは一人でペラペラと喋り始めたけど、もう私の耳には届いていない。

これでまた、敵が増えちゃったのかな…。

その帰り、五十嵐くんは交通事故に遭った。

左足を、骨折したらしい。

私は彼のとなりの席なので代表でお見舞いに行ったけど、花は投げ捨てられてしまった。「いらねえよ」って。

五十嵐くん、足踏んじやったことまだ怒ってるみたい。

あゝあ、どうしようかな。

笠井さんたちのこともあっていろいろ大変なのに。

人付き合いって何だか複雑でとっても難しい。  
ほんとにほんとに、どうしよう…。

「はあ…。」

ダメだ。音が出ない。

夏のコンクールまでにはあと二ヶ月しかない。

部員五〇人のうち三十五人しか出場することが出来ないけれど、私はすでに学年無差別の部内オーディションで受かっているから、うかうかとはしてられない。

桔平くん…皆川桔平くんも、受かっている。

オーディションに受かったコンクールメンバーと補欠メンバーは夏休み中も練習がある（当日も夏休み中だからね）のに、どちらでもない人たちはずっと練習無しだといううちよっぴり悲しいルールがあるけど、やっぱりコンクールで良い賞を獲るためなら致し方ない。

当日が二カ月後にまで迫った今、コンクールメンバーとサブメンバーは別々に練習していて、こっちに一年生は私を入れて二人しかない。

何だか私だけ皆に遅れをとっているようで。すごく心配っていうか何というか…。

「大丈夫だよ優愛ちゃん。」

「大丈夫じゃない…私、シの音出ないんだもん」

そう、私は一番高いシの音が出ないのだ。

いくら桔平くんに励まされたって、フルートは低音と空気が混じったような音しか出てくれない。

「優愛ちゃんさあ、もっとリラックスしてみなよ。あと何か悩みでもあるの？音に全部、出てるよ？」

悩み…。私は今、たぶん五十嵐くんのことを悩んでるんだ…。

笠井さんたちのことは、いつでも考えないようにしてるから大丈夫。私が五十嵐くんの足を踏んじったから…そのせいで骨折したのか

もしれない。

それとお見舞いにと持っていった花を投げ捨てられたのが実はそうとう応えているのかも…

「ねえ。この後オレが話聞いてあげるよ。」

「えっ、でも…」

「部活が終わったら、な！ハイ練習練習！」

パンパン、と手を叩いて、桔平くん 私の個人レッスンは終わった。気付くと三十分もみてもらっていた…。

それから部活が終わるまでは、あっという間だった。

コンクールメンバーはほとんどが二、三年生なせい、片付けも速い。

「お疲れ様でしたー」

入り口のところで一人一人に挨拶をしているのは桔平くん。

そんな彼と目が合ったかと思えば、パチンと片目で合図をしてさっさと音楽室を出ていった。

たぶん、「下駄箱で待ってる」と言いたいんだろうけど。

私も慌てて階段を下りれば、やっぱり桔平くんはいた。

「来たね。じゃ、話してよ。」

靴を履き替えすたすと校門に近づきながら、私はドキドキする胸を抑えて話し始めた。

「あのね…同じクラスの五十嵐くん、っているでしょ？あの人が入院してるけどさ、私のせいかもしれないの…」

「どうして」

少し怒ったように訪ねられて、一瞬、ビクとした。

「私が足を踏んじやって、それで、骨折って…」

語尾はどんどん濁しほんでいく。

桔平くんはうんうん、と頷きながら聞いてくれた。

「私のせいで五十嵐くんが入院しちゃったから…お見舞いに行ったの。でもお花を投げ捨てられちゃった…」

「それは優愛ちゃん悪くないぜ」

暗がりの中に真っ白い歯を光らせて、桔平くんは笑った。

「だって普通足踏んだくらいで骨折なんてしねーよ。もしホントにそのせいで折ったんなら、あいつ相当コーラ飲んでんな」

ふっと笑ったその横顔に、私はドキつとした。

やっぱり、恋、しちやつてるな…。

「おーい、聞いてるかあ？」

「あ、う、うん…」

「だから、気にすんなよ？あと二ヶ月でコンクールなんだからな」

そっか…コンクール…。コンクールまでに、もう一つの悩み、打ち明けちゃおうか。

私が、桔平くんを好きだったこと。

「ねえ、桔平くんは好きな人、いる？」

思い切つて聞いてみた。

緊張して顔が強張る。だけど返ってきた言葉は意外すぎた。

「優愛ちゃん」

「え？」

「だから、優愛ちゃん」

こ、これってもしや…告白!？

「オレ、優愛ちゃんのこと好き…」

まさか両思い???うそ!??

「ねえ。付き合おう?」

突然すぎてびっくりだけど…私も、桔平くんのが好きだ…。

「うん」

ただの悩み相談から、付き合うことになるなんて。

でも私、とっても嬉しいよ。まるで夢を見ているよう。

つないだ手、あったかい。

黄色いお月様が、優しく微笑んでいるよ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2240c/>

---

100%

2011年1月18日16時12分発行